備陽史探訪

NO.15
発行
備陽史探訪の会

◎11月3日　舟旅への招待
◎大増員！　ずなじみ
覆面潜入　突撃ルポ

発行所
福山市西深津町
1863-2
神谷和孝方

『瀬戸内海海賊城めぐりに向けて』

田口義之

会員の皆さん、いよいよ本会始って以来最大の行事「瀬戸内海を船でめぐる」特別例会を来る11月3日文化の日に実行することになりました。始め、誰が言い出したのか定かではありませんが、会長の口からこの話が出るようになったのは昨年の暮頃だと記憶しております。会長に対する反抗心旺盛な私等若造共は「どうせできるものか」と内心たかをくくって会長の話を冷やかに聞いておりました。私も会長の「大きいことはいいことだ」という考えは基本的に賛成でして、この点「突撃レポート」からは陰に陽に攻撃されております……。それはさておき、こういう"危険な計画"は会長に任せるに限るへ失敗した時を考えて「ずるいね」ということで会長からこの話が出ると「はあいい考えですね」「やりましょう」といい加減な相槌をうっている内に、今年の8月頃には「9月例会でやる」、船は100人乗り、いや200人乗りだと大風呂敷を広げ、会員の皆さんにも広言して実行一歩手前まで行ったのですが結局「金がない」ということで無期延期、皆さんの御期待に背く儀となり、私など悔し涙にくれた訳ですが、ひょうたんから駒というのか今度講師を勤めていただく森本先生の御尽力で安い費用で200人乗りのフェリーを借りることが

出来、こうして皆さんに舞台裏の様子などをお見せできるところまでこぎ着けたわけです。

さて大変長い前置きとなりましたが当日のコース、見学地等を紹介して置きましょう。講師は歴史研究家の森本繁先生、フェリーは200人乗り、午前8時30分に蔵の浦を出航しまして、右にあぶとの観音さんを望みながら西南に進路を取り、因島・横島を過ぎ森本先生の村上水軍盛衰の名調子を聞きながら、因島の美可崎城址の沖を通過附近の地蔵鼻には海上からしか見ることのできない「尼法師の石像」があります。次に眼前に現れるのは岩城島、この島と赤穂島の間の狭い水道を抜け、右手に亀山城址を見ながら大島へ伊予宮窪に上陸、ここで町立水軍資料館を見学ここには水軍村上氏ゆかりの古文書武具等が収められています。次に行くのは村上一族の中で最大の勢力を誇った野島村上氏の本拠の野島城址に、海流が激しいので上陸は不可能に近く、当日の状態によっては断念して島を三周するだけになるかも知れません。しかし外からとはいえ一見する価値は十分あります。昼食は附近の海賊城址近くの砂浜に上陸して食べる予定―。まだまだ多く見るところはあるのですが、それは当日のお楽しみ、ということにしておきましょう。夕方5時30分には尾道港に到着、ここで解散する予定です。

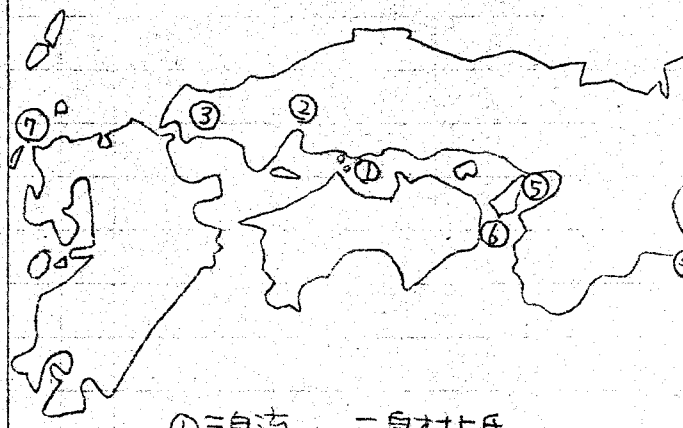
沢野ひとし画伯の「不思議画」をまねてみました

最後に皆さん、次号の会報で「11月3日は良かった。成功だ」との記事を共に読めるように、成功に向けて頑張りましょう。

七森歴史ミニ講座

日本海賊の戦法

(1) 主な海賊の流派



①三島流　三島村上氏
②一品流　毛利元就時代に秘伝
③能島流　毛利家船奉行が作成
④九鬼流　九鬼嘉隆が作成
⑤管流　秀吉の船奉行が作成
⑥磐井流　足利義尹が作成
⑦尊船流　オランダ船長より伝授

(2) 島の磯辺の防衛

乱杭・逆茂木・捨て綱・捨て石・沈船等をして、陸上には焙烙火矢・大筒石火矢等を用意する。

乱杭―海面下すれすれに杭を散らして打ちつける。

逆茂木―枝のついたままの大木を磯の各所に石を結びつけて沈める。

捨て綱―海面下すれすれに綱を乱れて張ち廿、石を結びつけて動かない様にする。

捨て石―大きな石を磯のあたりに散乱させる。特に大きいのは沖に、小石は岸辺とする。

沈船―船べりの垣をはずし、踏み立て板もものけて石を積み込んで沈める。

以上は敵船が容易に浸入れないための備えであると思われます。

では自分とこの船が出入するのはどうするのでせう。皆で七森先生に質問して下さい。―編集部―

焙烙火矢―火薬のついた弓矢の事

大筒石火矢ー大砲のこと。

(3) 水上での戦法

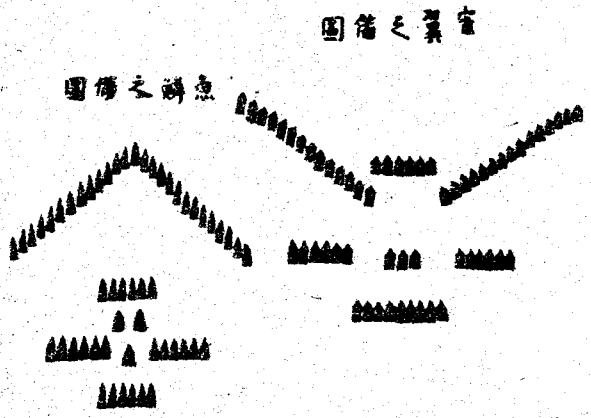
(イ) 鶴翼の備え

鶴が翼を広げた様な形。

(ロ) 魚鱗の備え

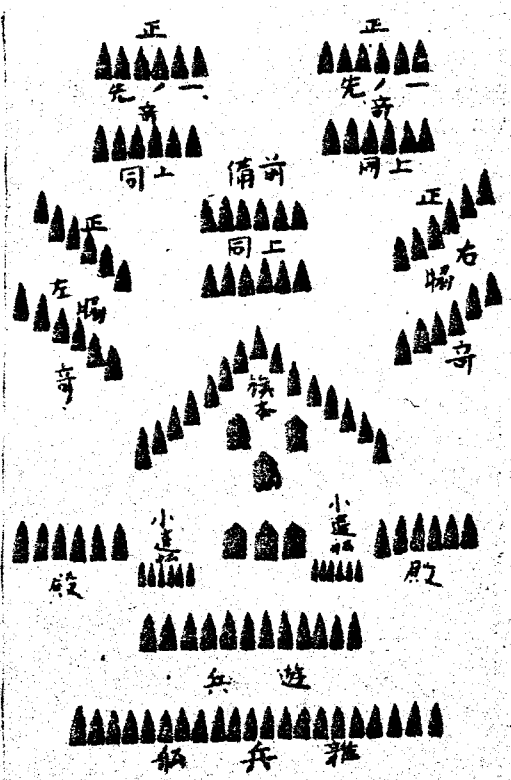
魚の鱗の形をしている。

（しかしこれが説明と言えるだろうか？左の図を見て納得して下さい。ー編集部）



(ハ) 左右中段の備え（天地人の備え）

オ一戦法（奇襲）とオ二戦法（正面攻撃）を交互に行なう。



《偏見自在》①

『天明一揆を探る会』の発足について

一昨年の秋であったと思う。「自由民権運動百周年記念」という一連の行事があり、私は秩父までこの種

の講演会を聞きに足を運んだことがある。この集会で驚いたことは秩父事件参加者の子孫という人々が壇上で紹介されていたことである。というのは秩父事件参加者の遺族や子孫は絶対に自分がそうであるとは明かさないという話を私は以前から聞いており、そのことは事件の外部的な評価はともあれムラという閉じられた社会でそしてそこで生き死にするしかない人々の事件に対する確かな態度の選択として私にはリアリティをもって受けとめられていたからだ。

もちろん事件参加者やその遺族が肩身狭く生きねばならぬ何の理由も無い。否むしろその様な周囲への斟酌などない方がましに決っている。にもかかわらず私はそこで展開される光景にだんだんといらだちを覚えて来た。いったい今日の様な彼らの変貌ぶりは何によるのか。それは「無知蒙昧な」村人の眼が「真理」によって徐々に開かれた結果であるとでも言うのか。恐らくはそうではあるまい。それは言ってみれば秩父事件というものがこの地方の人々にとってもはやつどうでもいいことになってしまったということにすぎぬのである。この単なる記憶の風化過程を何かしら正の価値の如く喋々する者を私は憎む。こういう人らは「歴史から学ぶ」とは言いながらせいぜいが口あたりの良さそうなところをつまむ位のことなのだ。

「したたかな民衆」という言葉が流行の様だが、おめでたい人々が考える様に民衆の「したたかさ」はいつも都合良く権力の方にばかり向けられるとは限らないことを歴史は胆に命ぜねばならぬ。「天明一揆」の具体相について私はまだ良くしらないが比喩的に言うなら「下剤する」位までは行ってみたいと思っている。(東)

谷あいの街
―私の好きな史跡―

吉田和隆

一乗谷は、室町時代中頃から百数十年にわたって越前を支配した、朝倉氏の本拠地である。朝倉氏は戦国の群雄割拠の時代から全国政権に親統一される間に武運つたなく滅びてしまった数々の大名の一つである。その時代を行った数々の大名の一つでは、信長に刃向って滅ぼされるだけの指の役割しか与の為か、大閤記を始め、この時代を扱うテレビ番組では、へられていない。

しかし朝倉氏は室町時代初期より守護代として越前にあり、やがて主家斯波氏に代はって守護となり、下剋上の一翼を担った一族である。そして応仁の乱では京に近い地の利から多くの軍兵を動員し、その帰趨が戦況を左右した。又、長きにわたって、室町最後の将軍足利義昭を初め、京までの政争に敗れた将軍、大名、荒れ果てた京を離れた公家、文人は多く朝倉氏を頼り、室町後期の政治文化に大きく係はっていたのである。

そのやうな輝しい経歴があるにも関はらず、歴史上の敗者として顧りみられる事の少ない朝倉氏に私は、同情と親しみを覚へていた。その本拠一乗谷は、その風雅な名前と、哀れな運命や、へ何時か訪ねてみようと思っていた史跡である。そこへ今夏、能登七尾城と共に旅する事ができた。

うら寂しい福井平野の中央に、県庁所在地の福井市はある。柴田勝家の北ノ庄城、前田氏の福井城は、共にこの地に築かれた。一乗谷はここより西方山間部の入り口近くにある。

狭い谷である。駅家町の服部の奥部を思い浮かべればよい。一乗川という小さな川は谷の中心を流れ、百メートル程の高さの山々が谷の両側に迫る。川を挟んで片側に朝倉邸と上級家臣の邸跡、向いに下級家臣の屋敷跡と、

職人、商人達の街が発掘されて姿を現はしていた。

発掘された街を歩くと、石で積まれた水路が縦横にあり、雪深い地方の谷合いという場所ゆへの排水の重要さを知った。又石垣、礎石、倉庫跡井戸等に夥しく石が使はれ、石で積まれた立派な街という印象を得た。

ところで、一乗谷の地の利はどうだろう。平野部からは近いとは言へ、谷からは山々の連なりしか見へない。しかし谷の上と下にはそれぞれ木戸跡があり、谷を見下ろす山にも城跡がある。事あれば、木戸を寒ぎ、山城に兵を配せば、少ない兵でも容易に守れる。朝倉邸は高く厚い土塁、広い堀を三方に持つとは云へ、単郭であり、所詮邸に過ぎない。一乗谷は谷自体が城、つまり街を囲い込んだ城と云べるのである。

この地を朝倉氏が選んだのは、加賀を始め、北陸の優勢な一向一揆と常に悪戦苦闘せねばならなかった朝倉氏の歴史による物だろうか。

谷より下へ数キロの地に資料館がある。広大な建物に出土品、画像、古文書が展示され、壮観であった。これに匹敵するだけの出土品と、史的価値をもちながら、お粗末の至りの我が草戸千軒を思い、残念であった。

風土記の世界

七森義人

此は出雲国風土記の丘

西に神魂神社、八重垣神社の有る山々を望み、南に天皇陵が眺め、東に国府跡、条里制に感心し、北に神名樋野山を拝む。

此様にすばらしい環境にありながら風土記の丘は整備が不充分、間違った

整備がされている資料館内の展示品は風土記の物が少なく、他県の品も有り、出雲としての特色が少しも無い。しかも展示室が一室という狭さで品数が少なすぎる。

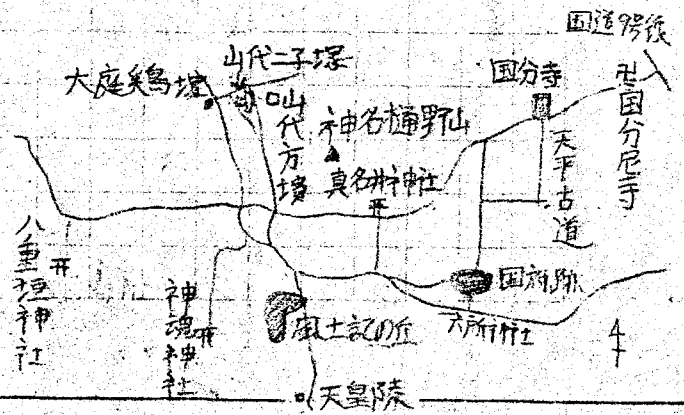
資料館のほとりに中世豪族の復元が有るが、礎石は必要なく掘っ立て小屋のはずである。

国府跡、国分寺跡、神名樋野山、山代方墳、八重垣神社、天皇陵等の様なすばらしい史跡がすぐ付近に有りながら、一体感が無い為に「風土記の丘」のみで終ると云う様になる為に、一体感をもたせれば、他のすばらしい史跡がもっと多くの人に、簡単に見る事ができる様になると思う。

どこの資料館でも一部は違いますが云える事だが、展示品と説明文で終りというのは少しさみしく資料館内に展示品等に関した文献、VTRを置いている様な室を置いてもらそこで更に深くわかる様にしてもらいたい。(少し金銭がかかるけど)

もちろん良い点が多いが前記が良くなれば更に良くなるでしょう。

北は歩く人が少なく資料館以外は行かず、国府跡の様な広い所で草花がただ風にゆれているのを見ながら思索にふけるのはとてもおもしろいですよ。



覆面潜入ルポ＜例会寸評＞

その5　七森の兄貴の巻

七森兄弟というってもそれは西武の松沼兄弟やマラソンの宗兄弟のようにとりたてて何かすごい！といった類のものでは全然ない。たウ千の会に兄弟で入っているのはこの二人だけであるのでそれはそれで何となくエライ！とゆうような気もするとゆうまでの話である。

七森(弟)とは言うまでもなく七森義人のことである。この男の政治思想は厳正中立(幻想だぜよ)そしていつも例会時の他人のトイレの心配ばかりしている人なのだが、彼の書く文字は＜文字＝伝達手段＞という世間の常識をあきれるまでに破砕しており、それは同時に彼の政治的立場をも裏切っているのである。私達は彼の筆跡を次の様に呼んで恐怖している。曰く、過激な書体！と。ま、それはさて置き七森(弟)が年が若いにも関らず当会では珍しい篤実な研究者タイプの人間であることは以上の説明からも良く解られたことと思う。(解る訳がないか)そしてこの七森(弟)が歴史研究の道にのめりこんでいったのは七森(兄)の影響であるというのもまた有名な話である。私が以前この話を当人の口から聞いて「ブーンそうだったのか」と思ったのは実は七森(兄)にまだ会ったことが無かったからだ。七森(兄)の真実の姿を識った今、私はこの逸話をほとんど信じていない。

七森(兄)について語ろうとする時これはどうしても今は遺れてしまったユース・ド・マップ・クラブ(U・M・C)について触れない訳にはいかない。U・M・Cとは一言で言うと現在当会副会長である田口が自分の歴史知識をひけら

かしたいために作った団体で（しかしこの人の性格は高校時代から少しも変ってないのね）当然ながら会員といっても歴史に対する関心はほとんど無かったのだが、時にはアメをしゃぶらせたりスリ時には暴力的に参加させたりしてたのだ。私は見たわけではないけどそうに決っているのだ。（それを裏づける様に旧しMCのメンバーはほとんど福山に帰ってこないのである。）まあそれにしても「今はなき」しMC」は私も数回メンバーに会ったこともあるけど「えらぶり田口」を筆頭に「ばんごう関戸」とか「アシカいじめ柏原」とかのっそり松本」「酒よわい岡内」といった風に何だかよく解らないけどまるでそのスジの方々の様にやたら冠頭詞をくっつけた人々が跋扈しており仲々多士済々であったのだ。しかしその様な中にあってしかも他の追随を許さぬまでにユニークであるのは何といっても七森(兄)ではあるまいか。

七森(兄)のまき散らした数々の奇行については現在企画中である83年キャンプ報告『仙養ヶ原に星は降る』に収録する予定であるので今余り多くは書けないが彼を特色づけるものとして〈火〉人の異常な執心があげられる。つまり火を見るとやたらに興奪するのだ。そう言えば七森(兄)はキャンプに必ず花火をもってくるが、これが線香花火などといった風流なものではなく、「パラシュート付花火」とか「ピストル形花火」とかいかにも「これで騒ごうよう」という意図が見え見えのものばかりなのである。このことは火を恐怖する原始の心性からは多少進化しているとはいえ火を制御する文明人には未だ及ばぬという彼の位相を語って余りある。七森(兄)はなぜか

「キャンプといえば絶対キャンプファイヤーだよね」という信仰をかたくなに持っている人であって、陽も落ちて宴会が始まる頃にはもうやりたくてウズウズしており、時折「あっむこうでキャンプファイヤーやってるよ。楽しそうだねえ」などと白々しいことを言って気をひこうとするのだが、もうすっかり酒が入ってしまった我々によって厳しく無視されるのであった。そして終にはあきらめの悪い七森(兄)はトコトコともう消えてしまった他所のグループのたき火のあとにしゃがみ込み「はあァ」とため息なんぞついて見たりするのだがもういいかげん眠くなってしまった我々によってさらにさらに無視されるのみなのであった。

(七森(兄)は今回の出雲旅行に名古屋から駆せ参じるという義理固さを見せてくれた。エライ!よって特別の恩典をもってルポに載せてあげることにしたのだ。だから今度の正月休みには青柳ういろうを忘れないように。)

広島県地方史研究団体連絡協議会
中世山城部会「開催のお知らせ
城郭研究部会一同

来十一月十三日(日)午前10時より、福山福祉会館(本町一-三十五)大会議場に於いて、「広島県中世山城シンポジュウム」が行なわれます。県内の山城研究者が一同に会して山城研究の問題点を話し合い、その解決方法を討議しようとするものです。午前中はアトラクションとして研究発表が行

なわれます。無料ですので多数御来場下さい。もちろん本会も重要メンバーとして参加致します。

『研究発表』午前10時より

① 新祖隆太郎氏（三次地方史研究会）
テーマ「未定」

② 田口義之氏（本会城郭研究部会）
テーマ「備南の主要山城について」

（附記）　委しい事を知りたい方は
0849(53)6157
田口義之まで

行事案内

11月例会『瀬戸内海村上水軍の遺跡めぐり周航の旅』

◎期　十一月三日（文化の日）

◎集合時間午前八時十五分鞆港。

◎委しくは別紙をご覧下さい。

申し込み先　神谷和孝方
（TEL）2ノ1394ノ0

編集後記

秋です。読書に、研究に、史跡の探査に格好の季節です。会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

今号は都合で下旬の発行となり、時間の制約から常連の文章が殆どとなりました。本誌は会員への連絡、諸紹介と共に、会員の発表の場でもありますので、どしどし原稿をお寄せ下さい。特に「我が町」「私の好きな史跡」はシリーズ化を企画しておりますので勧迎します。原稿は左記にお送り下さい。

〒720
福山市川口町3-18-13
種本実
TEL 54-2047